

間 鹿 及 子 大

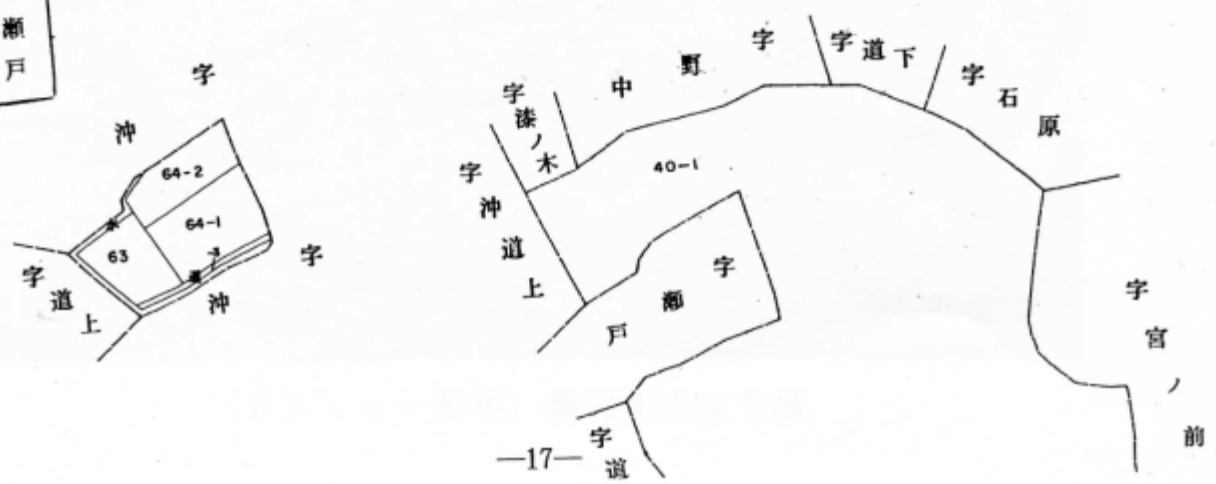
四

原 ヶ 吉



字 沖

字 瀬 戸



第一章 大字 鹿間（しかま）

鹿間は、高原川右岸にて、集落は南は字六郎東を和佐保、北を吉ヶ原、西は川を挟んで船津の下流、平及び木地屋に位置する。

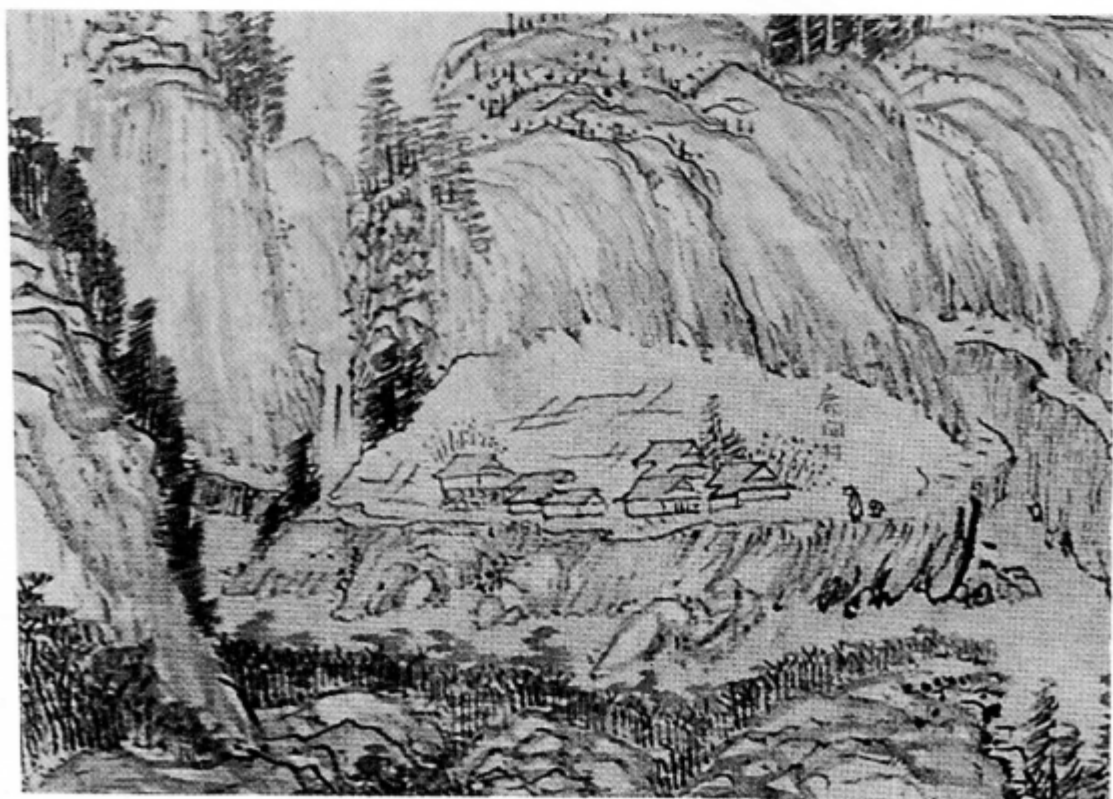
鹿間の地名は、陸奥の国に色麻郡色麻郷が、また播磨の国に飾麻郡があるが、その国の人がこの地に来て住みつくようになったか、あるいは江馬氏の家臣に「鹿間」などという武士がいてこの地に居住したのか、江馬氏の関係書類にも今のところつまびらかでない。

また、斐太後風土記には、村名不詳と書かれている。

動詞シカムは、鹿間村の周囲の山の状態から近いような気もするし、動物の鹿については、「鹿・猪・猿等が多くてたので年貢を免除してほしい」との古文書があるところから考えるとうなづけるところもあるように思われる。

また、カノ一切り替え畑、焼き畑から考えると、「カノマ」すなわち「鹿間」ということになり、一番現実に思える。村のはじめはおそらく焼き畑や切り替え畑から始めたのであろう。

また、「ロクマ」と呼んだのではないか。土釜村の隣接地に「木地屋」「ろくろ」という地があり、木地屋は木地師がいた地、ろくろはろくろ師が住んでいたところという。この中間のことを「ロクロ」の間と言う解釈にはならないだろうか。



越中東街道図鑑（神岡マップより）